

鳥羽のお宝 再発見!



vol.45

教育委員会生涯学習課

☎ 25 1 2 6 8

鳥羽の偉人門野幾之進資料

門野家は鳥羽藩主であった稲垣家に仕えてきた士族で、幾之進の父豊右衛門は慶応元年（1865）年、第2次長州

征伐にも出向いています。幕末の明治政府と幕府の戦いの際、鳥羽藩は幕府軍として参加しましたが敗退し、その責任と敗戦処理を任された豊右衛門は苦勞を強いられました。その功績が認められ最後は家老の地位を得ています。

その豊右衛門の長男として安政3（1856）年に生まれた幾之進は幼少の頃から英才教育を受け、6歳の御家流習字、7歳で地理、物理、博物学を習得していきます。

明治2年に版籍奉還がなされると、明治政府は有能な人材を確保するために各藩から



門野家に送られた書状

「貢進生」といって優秀な頭脳を提供させました。その貢進生として幾之進は14歳で東京の塾に出されます。その世話役はすでに活躍していた近藤真琴だったといわれています。

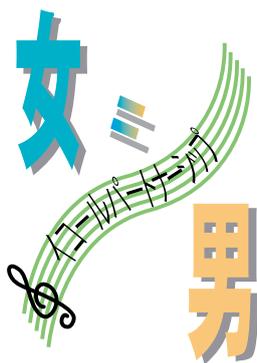


門野家資料

門野家資料は平成16年に門野家より市に寄贈されたもので、実物資料135点、冊子資料70点、ポストカード45点、はがき封書資料2、443点、書籍資料114点、写真資料46点、書画資料16点、その他5点、合計3、285点に及びます。これらの資料は、地方士族の質素な生活の実態を表しており、極めて貴重なものです。

特に幕末に用いられた戦用具は鉄砲・槍・刀・馬具・鎧・甲冑・火薬入れなどすべてが揃っていて鳥羽藩の歴史資料として価値が高いものといえます。そのため、平成24年3月1日に市の指定文化財（有形・歴史資料）に指定されました。

この資料の一部については、鳥羽1丁目の歴史文化ガイドセンター2階の門野幾之進記念館にて常時公開しています。ぜひ、ご来場ください。



とかく男というやつは？

vol.109

市民課人権・生活係

☎ 25 1 1 2 6

過去の本コラムにて、「とかく女というやつは」という題名で記事が掲載されたことがあります。

『とかく女というやつは、やさしくすればつけ上がり、怒りやふくれる、どつきや泣く、終いにや夜中に化けて出る』（落語などでよく出る言葉）

男性は一家の稼ぎ頭で、優位であるため、女性に対して「やつ」と呼び、女性は、男性の庇護の元、家庭を守るの当たり前で、やさしさに甘え、執念深い生き物である。

この記事の掲載から10年。時代は大きく様変わりしました。まだまだ、女性の社会的地位の向上は見られませんが、夫婦共働きも増え、今の男性は、昔に比べ、家事や料理、育児など進んで手伝い、少しずつですが、女性が社会へ進出できる環境が整いつつ

あると思われれます。

「草食系男子」などという言葉が一般的になった現代ですが、今後、何十年先には男女の立場が逆転し、女性から見た男性は『とかく男というやつは、少し甘えりや皿洗い、怒りやすねる、冷たくすれば、おろおろし、おだてりや夜泣きの子守りする』でしょうか。

今も昔もこれからも、夫婦、男女はさまざまな立場において、お互いを尊重し、対等なパートナーでありたいものです。

